

朔北の道草

—ソ連長期抑留の記録—

昭和五十二年二月十一日 初版発行
昭和五十二年十月十五日 三版発行

朔北の道草

――ソ連長期抑留の記録――

頒価 三、〇〇〇円

編集・発行者

朔 北 会

(代表 草地貞吾)

東京都田無市南町三―二四―一四

鏡 清蔵方

振替口座東京九―一八六六九四

電話 〇四二四―六四―一二七七

印刷 株式会社 光洋社

東京都新宿区山吹町一八四

電話 〇三―二六九―〇二二(代)

朔^{さく} 北^{ほく}

漢和大辭典によると、朔の字の意義には、ついたち、天子の政令、はじまる、はじめ、きた、北方、あさ、小鼓、姓などがある。

朔北とは北方塞外の地、北方の意。

そのほか、北方を意味する朔の字を用いた熟語には次のようなものがある。

朔氣——北方の寒烈の氣

朔禽——雁の異名（北方の寒地を好むから）

朔空——北方のそら、北地

朔管——北胡の笛

朔地——北方のえびすの地

朔土——朔北の地

朔馬——北方の馬

朔風——きたかぜ

朔漠——北方流沙の地



▲ハバロフスクの日本人墓地

▼ハバロフスクのソ連共産党学校



異国の丘

★ 上の写真の墓標と鉄柵は、昭和三十一年十二月、第十一次帰還の人びとが帰国を前にして、異国の丘に眠る戦友へのせめてもの供養として、自分たちの手でつくって残してきたもの。現在、ハバロフスクの日本人墓地は、ソ連当局によって立派に整備され、清掃も行き届き、毎日花が捧げられているという。だが、こういうのは外国人に見せるためのごく限られた

ものだけで、ソ連全土にはいまなお、数万の同胞が土盛りも墓標もない荒野の土の下に眠っており、それらの所在すらさだかでないものが大部分である。

★ この写真にある党学校は、昭和二十六・七年頃第六分所にいた日本人抑留者たちが建てたもののほか、ハバロフスクにはカガノビツチ工場裏の火力発電所、ウスリー河畔の造船所をはじめとし、各種の工場施設、学校、住宅など、日本人抑留者の汗と涙で建てられたものが沢山ある。

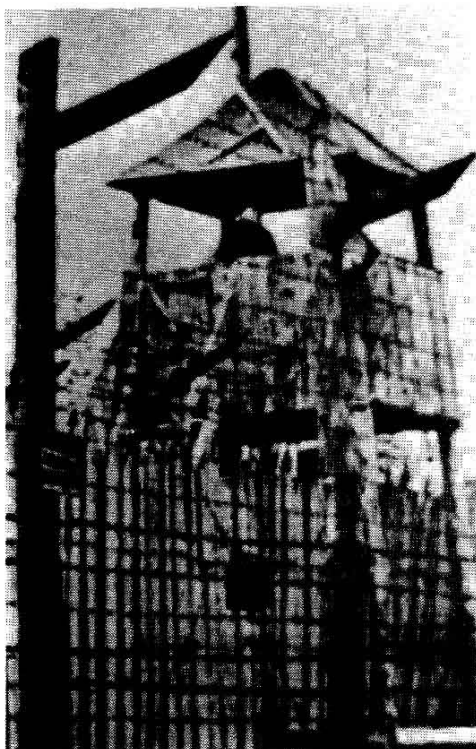
収容所

▶ ハバロフスク第21分所の風景



◀ 望

楼



家族への手紙 ◀ ▶

貴方へ
 只返信のミツテナル
 眼が悪クナラハ視ノヤツ
 眼薬ヲ送ツテシ
 早く飯田様ニ當局
 二頭、飯田運ニ生テナル
 九月九日

СОЮЗ ОБЩЕСТВ КРАСНОГО КРЕСТА
 И КРАСНОГО ПОЛУМЕСЯЦА СССР
 Почтовая карточка военнопленного
 俘虜用郵便券 (戦時)
 Бесплатно
 Кому (受信人) 徳岡 恒子
 Куда (同住所) 日本三重縣三好市平原
 (страна, город, улица, № дома, округ, село, деревня)
 Отправитель (發信人)
 Фамилия, имя, отчество военнопленного
 姓名 徳岡 恒子
 Почтовый адрес военнопленного
 住所 三好市平原
 СССР 05-1
 ГОДА. МЕС. ДН



▲ ハバロフスク第4分所における最後の慰霊祭（昭31・12）



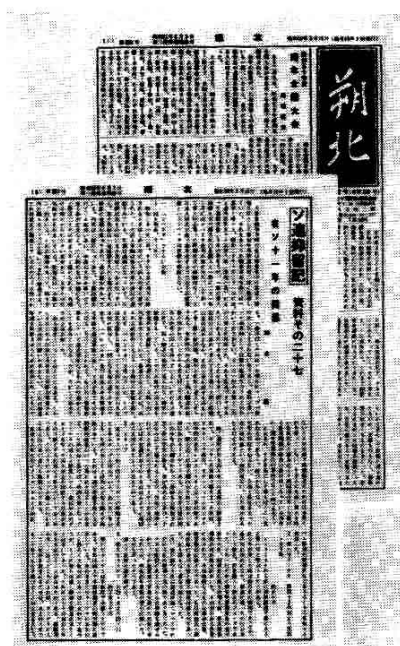
◀ 興安丸上の歓呼（昭31・12・26）



◀ 遺骨を抱いて

祖 国 帰 還

朔 北 会

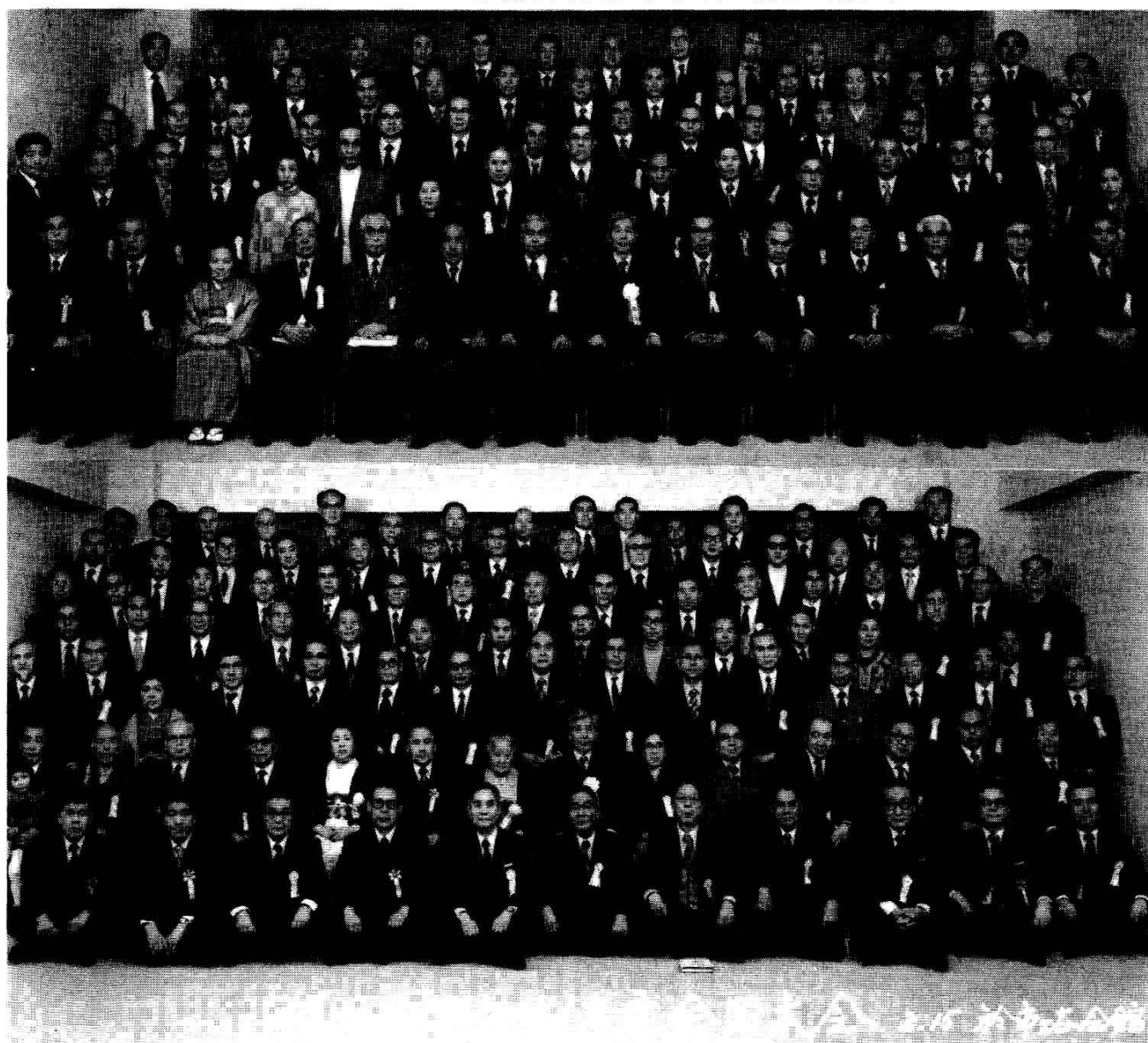


▲ 機関紙朔北と抑留記資料



▲ 長谷川前会長遺影

▼ 全国大会記念写真（於市ヶ谷会館）



新聞は 記録する

涙の再会

ヒゲ面にすがりつく

興安丸 粉雪降る引揚棧橋

涙も見せず
「位ハイに動かす」

興安丸の引揚棧橋に、粉雪が降り、乗客たちは涙を見せず、位ハイに動かす。乗客たちは、船の甲板に立ち、手を振り、涙を見せず、位ハイに動かす。乗客たちは、船の甲板に立ち、手を振り、涙を見せず、位ハイに動かす。



ソ連帰国船興安丸



帰ったぞノ 興安丸船上に船なりになって日の丸を掲る乗客たち

入院患者を先頭 再会、11年の悲願が

脱走して捕る

脱走して捕る。興安丸の乗客たちは、船の甲板に立ち、手を振り、涙を見せず、位ハイに動かす。乗客たちは、船の甲板に立ち、手を振り、涙を見せず、位ハイに動かす。

警官の妻子36人自決

東京の伴田氏、満州の悲劇を語る

警官の妻子36人自決。東京の伴田氏、満州の悲劇を語る。伴田氏は、満州で警官として勤務していたが、戦争で家族を失った。彼は、家族の死を語り、戦争の残酷さを訴えている。

感謝のほかなし。全国民へメッセージ。感謝のほかなし。全国民へメッセージ。感謝のほかなし。全国民へメッセージ。

撮影も自由に
新設される工場。撮影も自由に。新設される工場。撮影も自由に。新設される工場。

歴史の虚実。歴史の虚実。歴史の虚実。歴史の虚実。歴史の虚実。歴史の虚実。

東の二人

は し が き

昭和二十年終戦の後、満州・北鮮及び千島・樺太から、多くの軍人がソ連に連れこまれた。私はその数を七十万前後と推定していた。が、厚生省調べでは、ずっと少なく五十七万余となっており、これには軍属・民間人も含まれている。

抑留は、ポツダム宣言に違反したソ連の横暴であった。この無法無体のため、どんなに入ソの同胞が苦しめられ、また多数の生命を落としたことか。

のみならず、ソ連は共産主義の洗脳に加うるに、いわゆる戦犯を製造した。

もともと日本国としては、八月十五日の終戦の時点以降、敵国勢力圏内におちいったものを俘虜とは認めなかった。また、国際法を無視した思想教育の実施や戦争犯罪人などというものは、全く考えてもいなかった。

日本政府が認めもせず、考えてもいなかったことを勝者のソ連は臆面もなく強行したために、ソ連の手先となった相当数の日系アクチブは、いわゆるシベリア民主運動を煽り立てた。自己批判・相互批判から大衆的吊し上げの人民裁判形態にまで発展し、赤旗の下闘争歌がラーゲリを完全に風靡するに至った。

もうこうなれば革命だ。アクチブ以外の将校も兵も、官公吏も開拓団員も、老いも若きも「働かざる者は食うべからず」の原則通りただ員数としての労働者になり果てた。

完全に行動・言論の自由なく、牛馬の労働は強化され、お互いの監視は嚴重を極め、前職者の摘発ははじまった。

いつしか、日本人持前の明るい笑いは影を没した。鬼哭啾々たる陰惨の日々が続く。かくて、二年経ち、三年は過ぎる。血眼になって、代々木詣でを絶叫したり、天皇島敵前上陸を呼号しながら、勇躍？ 出征の途につく赤旗梯団も現われた。憐れなるものよ、汝の名はデモクライトであった。

昭和二十四年秋、スターリン大元帥に対する珍奇な感謝文奉呈をもって、シベリア民主運動は総括された。そして昭和二十五年解氷の頃、ソ連は日本軍事俘虜の還送は終了したと発表した。

その後に残された者は、いわゆる戦犯で、ソ連はこれを囚人として取扱った。この数も明白に分らないが、三千人前後はあったであろう。多くは前歴者と呼ばれ、情報・宣伝・国境監視・特務機関・憲兵・警察・防疫関係等に勤務従事した者であった。右の外、ソ連官憲が特に着目した中で、これという刑目に該当しない者には、「資本主義援助」という至極便利な条項が適用された。とにかく、受刑者の大部は、二十五年刑を与えられて囚人ラゲリに入り、強制労働に服することとなった。

さて、これらの受刑者は一体、いつの日、懐しの祖国、日本に帰されるか。それは神様のみが知る長期抑留の悲しい運命の星の下におかれた人たちであった。万事休すだ。かくなつた以上、受刑の囚人同胞は、皆目分らぬダモイ（帰国）を唯一の夢として、今や無用の民主運動は敢然と投げ捨てた。

烏兔^{うと}勿々^とというけれども、シベリアの一年は長い。別して彼の地の冬は寒いを通り越してきびしかった。

朔風^{さくふう}凜烈^{れんれつ}として 満目^{まんもく}蕭条^{しょうじょう}。

北斗^{ほくと}燦^{さん}らんとして 氷雪^{ひょうせつ}に映^{うつ}ずる。

やがて、春来たりなば、解ける凍土にも青草は芽を出す。以前からの根や種はまだ生き残っていたのだ。

「見よ、この青草を。われわれこそ朔北の道草。死んではならないぞ。いつの日か日本に帰れる。それは、朔北の原野の道の辺に踏みにじられる芝草であろうとも、生あるかぎり、必ずやダモイできる。頑張ろうぜ。お互い助け合いながら……」これは長期抑留者の期せざる悲願であった。自然の合言葉であった。

こうして、またも二年、三年、四年、五年！ 天運循環して、かつて悲惨なる朔北の道草は、今や 有難い日本皇国の民草として帰って来た。ただ、永遠不帰の同胞の英霊に対しては、限らない弔意を捧げねばならぬ。

本書は、かかる史上比類なきシベリア抑留の実相、「朔北の道草」の真実を、そのまま広く江湖に紹介せんとするもの。^{おのづか}自ら共産主義の非道残酷、しかして皇道精神の高邁卓拔さを、それぞれの手記の底辺に汲み取られるならば、望外の仕合わせである。

昭和五十一年八月十五日

朔北会々長 草地貞吾

目次

写真

はしがき

巻頭言―資料収集にあたって……………11

第一篇 概説……………13

第二篇 抑留記……………35

チタ地区袴田民主を体験す……………37

友を偲びて二十年……………43

イワノーウォ収容所……………55

レシヨートの一夜……………59

私の抄歴……………66

溝口壇平・橋口松雄
安藤博・山村昌雄

大堀事件……………74

私の西遊記……………76

ドープロボリスキーの友情……………86

私の抄歴……………91

小原正豊・近藤毅夫

ウラルの囚人たち……………93

私のシベリア昆虫記……………109

私のソ連抑留記……………112

橋本 確

監獄・護送・ラーゲリ……………124

松山 柳谷

獄中の囲碁大会……………134

岡田 福男

誇り高き虜囚たち……………137

中林 仁良

チタのチュルマで……………	菅原 萬	138
極北の外国人虜囚たち……………	岡部 狷介	142
トプチンの指……………	曾根原正巳	145
新京―マルシャンスク―ハバロフスク……………	村井与三郎	148
抑留余話……………	中村 稻夫	162
思い出の記……………	鈴木 敏夫	165
牢獄の中のトルコ帽……………	斎藤平五郎	171
官費旅行……………	井口 仙吾	183
私の抄歴……………	益田 泉	186
私の見て来たソ連という国……………	平田 秀夫	187
シベリア大密林……………	佐藤 信重	192
ラーゲリ遍歴……………	前川 宗雄	200
ダワイに生きる……………	勝部 正寿	203
囚人護送車の旅……………	斎藤平五郎	207
獄中の唱声……………	斎藤平五郎	213
遺稿「クロ物語」から……………	山田 正治	226
豚と捕虜の物語り……………	梅宮 春美	229
ソ連抑留生活の思い出……………	山口 敏寿	232
ソビエト抑留記……………	鹿野 久雄	236
村田諜報団と白帯会事件……………	畑谷 好治	249
三本の指……………	坂田 公人	251
牧場生活……………	酒寄 国光	252
シベリア友達の思い出……………	小原 豊	272

抑留記……………	矢野 市雄	286
抑留ロシア語解説……………	河辺 白楊	297
赤い国の記……………	坂口 栄治	306
戦友よ、御魂よ眠りませ……………	黒澤 嘉幸	326
私の体験記……………	斎藤 浩三	328
チタからウラルまで……………	谷口 新次	332
生徒心得……………	飯島 良雄	359
四つ児の親ワシカの嘆き……………	石出 友治	360
シベリア抑留記……………	菅野 五郎	363
ソ連の無法処刑の経緯と抑留遍歴概略……………	田中 敏夫	388
ソ連の監獄で示した故村上氏の国際愛……………	溝口平二郎	396
シベリアで散った人びと……………	曾根原正巳	403
故人と御遺族……………	曾根原正巳	403
ソ連抑留間における留守家族に対する配慮と 引揚げ後の所感……………	木村孝三郎	407
ソ連抑留史資料……………	大林 静雄	410
ソ連抑留記録抜萃……………	野崎 三郎	412
ソ連抑留史資料……………	木村孝三郎	426
戦友のみ魂に捧ぐ……………	中川 芳夫	443
私の体験記……………	中島 満雄	446
「収容所群島」の住民として……………	編 集 部	450
ウーファからハバロフスクへの旅……………	坂口 栄治	453
帰国前後の状況……………	武部 松雄	459
金歯と黒パン……………	曾根原正巳	462